

教室に声をとりのもどすために

——群読『平家物語』の群像——を中心に——

片 桐 啓 恵

一、声を解放したい

(1) 声を出せない、話を聞けない生徒たち

彼らは普段おしゃべりである。必要以上の大声でしゃべり、笑う。静かにすべき時も私語が絶えない。その一方で、授業中の発言の声は聞き取れぬほど小さく、朗読の声も小さい。私の目の前に、そのような生徒たちがいる。また、生徒たちの話を聞く態度がまったくなくなつていないと、教師は口を揃えて言う。

これらは背中合わせの現象である。自分の思いを声にして、確実に相手の胸に届ける。また、相手の言わんとすることを真剣に受け取めるという大間としての基本的なコミュニケーションの姿勢ができていないことに原因する。それは意識以前の「体」の問題でもある。無理もない、と私は思うのだ。今年も一年生が入学してきて、最初の三日間、オリエンテーションの名のもとにうんざりするような話がどれだけ繰り返されてきたか。「～してはいけない」「島商の誇を持って、伝統を汚さぬよう……」服装の細かい規定に至るまで、同じような注意が何度も繰り返される。それで教師の側は、高校生活の厳しさを最初から植えつけた気にな

っている。こうしたことが、三年間の学校生活の中で、集会の度に行われる。これでは「聞こう」という意識がなくなるといふより、体そのものが人の話に対して拒絶反応を起こしてしまふ。「話はずまらないもの」と体が思い込んでしまふ。ほとんど無意識に体全体が「閉ざされて」しまふ。

私たちが「へことばの学習」を考へるとき、この身体性の問題をぬきにしては、どんな学習も成り立たない。ことばを生き生きと使い、ことばを自らの生きざまに関わらせて育ててゆく人間をどのように育てよう。——人としなやかに関わってゆく身体と感性をどのように育てよう。それは基礎学力よりもっと基本的な課題であると思へる。

いわゆる中学卒業程度の漢字が書けない、教科書の文が読めない、というような低学力の生徒においてのみ基礎学力が問題なのではない。たとえば、私が現在共に学習している生徒たちは、学力そのものはさほど低くないが、号令と威圧によって動かされることに馴らされているため、「ことば」に対する反応が驚くほど鈍い。授業中はおとなしい。放課後のクラブ活動に備えて（特に普通科は）休養の時間と心得ている。板書を時間内にノートに写

し取ればそれでよしとしている。テストは程々の点数を取る。(その程度の力は持っているし、要領よく表面をとりつくりうることがとてもうまい。)しかし、ことが真に伝えようとしているもの、その奥にあるものを考える姿勢を持たない。ことばの学習が成立するか否かは、まさにこの実態との勝負にかかっている。

(2) 身を乗り出して話を聞く経験の積み重ね

では、どうすれば、彼らはことばに対して敏感になるのだろうか。私は考える。目の前にいるこの生徒たち、今までの一五〜一六年間、家庭生活、学校生活において、人の話を聞いて感動した経験をどれだけ持っているのだろうか、と。私は、自分の話、また朗読などで、彼らを感じさせ得るのだろうか。それができるかどうかはともかく、結局、教師は自身の話術を鍛える努力を続けるしかない。単に技術としてではなく、「語りかけること」、「語り合うこと」を自己の内に豊かに持とうとすること、常に真剣に全身でそれを生徒たちに語りかけていくこと、その時、私自身の生きざまは隠しようもなく露呈してしまうこと、それだけは肝に銘じておきたい。

話すこと、聞くことは一対一の人間が対等に向き合っていることを交わすのが基本的な姿であると思う。残念ながら、現在の日本の一斉授業の形態では一対四十余名の異常な形では伝えられる。本来交わされるべきことばが、一方的に流される。しかも、教師が高い所から見下して、生徒がうつむいていても、おかまいなしに一方的なことばはその頭の上を通り過ぎていく。ことばを身につける学習の場のそのような異常な現象をあまりにも当たり

前のこととして生徒は育ってきたのだ。コミュニケーションの成立し得ない学習形態の中で、一体どんなことばの学習が積み重ねられるというのか。

「静かに話を聞きなさい」とか「顔をあげて」とか言わずとも極めて自然に彼らが目を輝かせ、身を乗り出して話を聞くという経験を積み重ねさせたい。「話はつまらないもの」「授業は眠いもの」と体が覚えこみ、身体自体が拒絶反応を起こす。その実態と勝負するには、逆に「話はおもしろいもの」と体そのものに覚えさせるしかないのではないか。そのために教材研究や授業の工夫をするのはもちろんだが、折を見ては話のタネをためこんで話す。私が出張や研修で留守をした次の時間は、何かしら「みやげ話」があるものと生徒は思い込んでいて、たまにすぐに授業のつづきに入ったりすると不満そうな表情をし、「先生、みやげ話」と「はなしコール」が起こる。真面目な勉強よりは話を聞く方が楽しいというのが自然の情だろうが、それにしても、彼らは話を聞くことが好きである。それで、私も時折「おはなしおばさん」に徹する。授業の進度をにらみながらではあるが、他の先生と進度を合わせる必要のない気楽さで、授業のリズムを損わないという点さえ考えておけば、今自分が感じていること、考えていることを新鮮に伝えたい、「話の旬」を大事にしたいという思いもあって、「はなしコール」に呼吸を合わせることは大切に考えたいと思っている。

時に童話の読みかせ、詩や小説その他の朗読などをしたり、絵本を持って行って紙芝居風に読みかせをしたりする。最初は、

高校の授業になんで絵本が登場するのかとうさんくさそうな顔をしていた生徒たちも、二回め、三回めと、私が何か抱えて教室に現れる度に、今日は何を持ってきたのかという眼で首をのびして見ていて、「今日はいいもの持ってきたからね」と言つて「前に出ておいで」も言わないうちに教室のまわりに集まって来る。

いい絵、いい話をあの子たちと共有したいという思いで一つ一つ運び、「今日はいいもの持って来たからね」——まさにそのままの気持ちで教室に行き一つの話と人との出会いを大切に演出する。読みかきかせが終わって絵本をパタリと閉じると、ふーっと深い息をつく子がいたり、目に涙をためている子がいたり、そうしてワーツと拍手が起る。それを国語教室の日常の光景にしたい。その経験の積み重ねが、彼らの身体に溶け込んでしまひ、人の話を聞くこと、自分が話すこと、本を選ぶことの中に、自然に活かされていくことを願う。

(3) 言語活動を中心に展開する単元構成

——話す・聞く・声による表現の重視

前項で述べた「身を乗り出して話を聞く経験」を積み重ねさせることは、一つの伏線であつて、それだけで「コミュニケーションの姿勢」「人と交わる体」ができるわけではない。当然のことながら、受動の経験だけではなく、能動の経験の積み重ねが必要である。

国語科は「へことばの学習」である。バランスのとれたことばの使い手を育てることは、とりもなおさず、人間として、心の使い手としての成長を促すこと。自己の生きざまを見つめ、自己の生

活そのものに根ざす言語活動を展開させ、深化させること。それを考える時、私は言語活動を中心とした単元構成を重視したいと思ふ。

主題単元、ジャンル単元、技能単元（入門単元）のうち、実際には私自身、主題単元で構成することが多いのだが、三年間の学習構想を練るとき、主題単元と技能単元の組み合わせ、関連を頭に置き、中心には言語活動のバランスと展開を据えておきたい。

何といつても、話すこと、聞くことは、私たちの言語生活の最も大きな部分を占めているのだし、直接向かい合った人と人とのつながりをつくる活動である。それに声を出すこと、自分の声で豊かに表現することは、最も身体性に関わる言語活動である。授業中、小さな机と小さな椅子にへばりついて生徒はじつと耐え、教師の一方的なことばが流れていくという学習不在、むしろ精神的にも身体的にも拷問とすら言える状態を打ち破るには、生徒も教師ものびのびと動きまわり、議論したり、質問したり、相談したりとことばを交わしあい、ある段階では個々に思索にふけて、読むことや書くことの孤独な作業に没頭する——柔軟な生きものとしての学習活動がなされなければならない。学習の基本に「身体を硬直させないこと」があるのではないか。だからこそ体全体を使って「声で表現する」学習活動を大切に位置づけたい。

(4) 理解と再表現

能動的学習活動を特に古典学習において具体化するとき、理解と再表現の関わりを考えておきたいと思ふ。

「理解」とは「受け」の作用ではなく、対象を消化し、それを

わがものとして表現したいという志向に支えられている。真に理解されたものは、その人の中で消えることはなく、何かの機会に呼び起こされ、有形無形に表現の中に生かされていく。

現代人にとって難解なことばになってしまった古語と接する場合にも、これに変わりはないだろう。古典を単に現代国語訳を通して理解するだけでは、「古典を読む」体験をしたとは言えない。古典から汲み取ったものを自分の中に甦らせたいという志向のもとに、私たちは古文と対峙できる。

現代語訳ではなく、再表現を学習活動に取り入れていく。再表現には次のような方法が考えられる。

再表現

- 一、絵画化
- 二、文章化
- 三、音声化
- 四、劇化

細かくはそれぞれの中にさらに方法のバリエーションがある。文章化では、例えば、汲み取ったイメージをもとに詩をつくる、歌に歌物語をつける、鑑賞文を書く、評論を書くなど、さまざまな方法を取り入れることができる。また、絵画化、文章化、音声化を個別のものとしてではなく、組み合わせ取り入れることもできる。

今回は、音声による再表現の一つ、群読を取り入れた古典の授業の実践報告である。

(5) 一人一人が学習の主役

群読については次の項で詳しく述べるが、群読を学習活動に取

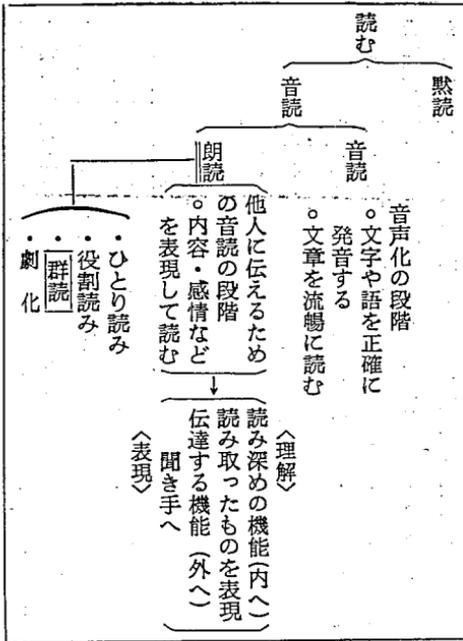
り入れたいと思った動機に(1)～(4)項の他に最も大きなものとして、
〈生徒一人一人を学習の主役にしたい〉という思いがあった。

昨年、三年現代国語(3単元、三クラス)、二年古典I甲(2単位、四クラス)を担当していて、主力を三年の方に注いでいた。二年の方は、一年間だけのわずか二単位の古典、生徒は古語辞典も持っていないという状態で、何ほどのことができるかと考えあぐねた。「うかうか眠っていらぬ授業」「集中して説明を聞く、ノートを取る、考えて答える時間を使い分ける授業」の段階までは持っていける。古典学習の不安を除くために予め現代語訳のプリントを配付し、授業では内容を読み取るためのプリントを用意して、それを中心に進める形をとってきた。家庭学習にはほとんど持ち込まず、授業に集中させるようにしてきた。また、時折「古典教室通信」を出し、知識の補充、情報の提供を試みた。だが、私には終始、本物の学習を経験させてやれないことへのうしろめたさがつきまとった。時間的にも肉体的にも、三年と二年と双方に全力を注ぐことは不可能だった。私は二年の生徒たちに頭を下げて、「今のような受け身の授業が『学習』だなどとは思わないでほしい。しかし、いくらそれを口で言ってもわからないだろうから、一年間のうち、一回だけは、あなたたちが自分で調べ、考え、創り出していく学習を組む」と約束した。

一斉授業の中では、いかに発問を工夫し、話し合う時間をとっても、生徒の受け身の姿勢を根本的に変革する力はない。一つの文章と出会い、その作品が持つことばのエネルギーとともに格闘していく学習過程の中で、自分の力によって学び、つかんだも

のを再表現する感動経験を一つ一つやりたい。そのためには、全員が力を出しきらねばやりおおせぬような困難な、しかし手応えのある仕事を留意する必要がある。平家物語の群読は、まさに格好の学習であった。

二、群読について



(1) 群読とは

「複数の人間による朗読」。登場人物、視点の転換、場面の起伏などによって読む人がかわり、一人で読んだり、数人で読んだり、大勢で読んだり、男声、女声を生かしたりすることで、朗読の表現をさらに豊かにすることができる。

□「群読」とはなにか

いわゆる「語りもの」の文学を活字の世界に閉じこめておいてはならない。とはいっても、声に出して読むとなると、多くの困難をともなうが、困難に立ち向かいそれを克服することが、そのまま時間を越えて古典を体感することになるだろう。

多くの人たちが一所に読みあう行為は、「読む」と「聞く」とが混然一体となって、古典の世界を体験的に共有する結果を生むだろう。任意のグループで、学生ならば教室で、古典の「群読」という方法で採用されて、さらにこの方法を推し進められることを望む。

声を合わせて斉唱のごとく読むことは、古典の文脈の分析をとまなわないので、読み流してしまふことになるだろう。「群読」は必然的に「分読」を前提とする。

「平家物語」による群読——「知盛」

「古典を訳す」 木下順二氏

※傍線…引用者

□群読「知盛」の演出

① 男声と女声の質の違いを利用し、そのおつかりあいにより相乗的な効果を生むとともに、男女のコーラス的な朗誦部をつくる。

② それぞれの朗読者の持ち味を殺すことなく、与えられたテキストの中にも可能なかぎりうまく生かす。

④ 平家の原文においては、語り手の位相が絶えず動いている。その転位するところを捉えて分ち読みのきっかけとする。

「知盛」の演出をめぐる

——デクラメーションへの試論——

横田雄作氏

「日本語の発見」より

※傍線：引用者

(2) 群読を国語学習にとり入れる理由

□群読を取り入れることの教育的意義

① 作品を音声化することによって、読みの深まることが期待できる。

② 実際に群読するにあたり、読み合うことによって、表現活動と鑑賞活動が同時的に行われ、読みの更に深まることが期待できる。

③ 群読のための分読について話し合うことによって、生徒の相互学習が成立し、読みが深まると同時に学習法を習得することが期待できる。

「国語教育に群読を取り入れることの意義

——群読の教育的効果をはかる——」

一九八二年六月

東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校国語科

□朗読を取り入れた理由

① 「語り物」としての「平家物語」を読み味わうためには、作品内容（内容的価値）を理解するだけでなく、原文が持っていることばとしてのエネルギー（文体的価値）をも感得することが必要である。

② 「群読」を取り入れた理由

i 「平家物語」の文章における語り手の視点が絶えず動いているので視点の転換ごとに読み手（朗読者）を替えると、聞き手にとって内容を理解しやすい。

ii 複数で読むことによってドラマ性が出て、学習者を作品世界に引き入れることができる。

iii 同じ箇所を複数で読むことによって、「平家物語」の持つ迫力（ことばのエネルギー）をも感じとることもできる。

「一の谷の合戦」（平家物語）の学習指導

——朗読を取り入れた学習指導を中心に——

一九八一年十二月
広島大学附属高等学校 世羅博昭先生

三、「平家物語」の群像」の学習計画

一九八二年十月～十一月

古典Ⅰ甲（二単位）

対象生徒 二年家政科一組 女子四三名

二年商業科二組 四四名（男一四、女三〇）

三組 四二名（男一九、女二三）

五組 女子四五名

(1) 単元 「平家物語」の群像

(2) 単元目標

。貴族社会から武士社会への激しい時代の移り変わり、うち続く合戦の中で、平安末期～鎌倉初期の人々の心をとらえていた

〈諸行無常〉 〈盛者必衰〉 の思想を単に嘆きの思想としてではなく、滅びの運命と背中合わせに生を生きぬいた一人ひとりの生きざまによって考える。

○「語り物」としての「平家物語」を持つ文体のエネルギーを群読することによって再表現し、体感する。

○グループ学習（研究・発表）を通じて、図書室での文献利用の方法、発表資料のつくり方、発表のし方を学び、全員が学習の主役になる。

※どの程度の群読を目指すか……。朗読するということの基礎訓練がなされていない学習集団で、どの程度の群読をつくり出せるか。今回の学習では、生徒の声を解放できればそれでよいと考える。今回はともかくも、朗々と読むことの楽しさを体で味わってもらいたい。グループ研究の段階で苦労して読みとったもの、自分たちがつかんだ「平家物語の世界」を人に聞いてもらいたいという熱い思いを、彼ら一人ひとりが湧きあがらせ、それをそのまま声に出してくれたら成功である。

(3) 教材 「平家物語」より

▲祇園精舎

▲宇治川先陣・木曾最期

▲忠度都落 ▲忠度最期

知盛（壇の浦より）

(4) 指導上の留意点

i 基礎的理解の面

・言語抵抗と古典工甲の限界（二単位、一年間だけの学習のた

プリント18枚（原文に傍注をつけたもの）

▲印は、教科書にある部分

（資料1）

め、文法はもちろん、十分な古文読解の力をつけることは望めない）を克服し、直接、内容把握の学習に入らせるために、

●原文に傍注をつけた資料」をテキストとして用いる。

●今回は、細かく文法をおさえて内容を読み取るという点はあるて目をつぶり、グループ学習によって、登場人物の会話などを中心に読み解くことに力を入れる。各場面毎に読み取らねばならないポイント、調べるべきことを「研究の手引き」（資料2）としてプリントにまとめ、配付しておく。

●グループ研究の段階で、「手引き」の問題を正確に読み取るようにグループ別、個人別に個別指導を行い、内容理解が深まるように導いていく。あくまで原文をおさえて生徒自身が考え、読み深めていくよう、個々の読み取りの段階に応じて、タイミングをはかりながらヒントを与え、辛抱強く待つ。この段階が指導の勝負どころとなる。ここで正確な読みを引き出せれば、「手引き」のポイントを中心にした発表資料のつくり方について助言を与え、発表を時間内に要領よくできるように十分な準備させさせれば、自然に内容のおさえができることになる。全体に対しておさえておくべき事項の指導、内容の補足は、グループ研究発表の段階で行う。

ii 学習活動の基礎訓練の面

●グループ研究の基礎訓練をこれまで全くと言っていいほど受けていない生徒たちなので、作業の進め方を、ていねいに、明確に指示する。この学年に対しては、今後グループ学習を組むことがおそらくできないので最も基礎的な段階から、や

や高度な段階（群読を今回のような構成で行うこと自体、かなり高度な集団学習である）まで一気にを行うことにする。即ち、使い方、作業分担、話し合いの進め方、学習記録のつけ方、発表資料のつくり方、発表のし方、聞き方、各段階毎に指示し、指導する。

作業量（問題の量）は、クラス全員が全力を出し尽さねばできあがらぬよう計算して用意してある。従って、誰か一人でも気を抜けば、ぎりぎりの日程の中で群読が完成できぬことになる。クラブ活動を大義名分にしてグループの仕事の分担を免除されるということは許されない。これは、本校の生徒の最も根本的な欠点である学習への姿勢にかかわる点であり、学習者一人一人に責任と緊張感を持たせること、のせること、仕事のリズムをつくることは大きな問題である。

一つの目標を持って、学習の緊張を持續し、苦しみをつきぬけて全員が一つになって群読を完成した喜びを生み出すために、日程に多少無理があろうと、どんなに苦しかろうと、期末考査、修学旅行前に何としても一気に群読完成まで盛り上げていかねばならない。

自発性・創造性の面

群読のための教材構成は、学習のねらいによっていくつかわの方法があるが、大別すれば二通りになるだろう。一場面を取りあげて、そこに登場するさまざまな人物の生きざまを考える構成法と、一人の人物に焦点をあて、物語全体の流れを見通していく構成法と。前者は広島大学附属高校の世羅先生

の授業で試みられ、後者の典型として木下順二氏の「知盛」（後に「子午線の祀り」に発展する）がある。今回はその中間の形になるが、教科書（明治書院「古典工甲」新修版）に採られた場面（祇園精舎、宇治川先陣、忠度最期）を生かして、さらにクラス全体で読み合うドラマにするために、構成しやすい部分を加えた。グループによって異なる場面を担当していても、常に他の場面とのつながりを意識させたい。特に最終的なクラス全員による群読の段階では、自分たちの声によって一つのドラマをつくるのだという意識を持たせたい。

場面と場面をつなぐナレーションを生徒自身につくらせる。この作業によって、各場面をつないで、一つのドラマとしての意識がさらに明確になるだろう。生徒がつくるナレーションの文章は「平家物語」の原文と比べて、ことばの密度やエネルギーが弱いかもしれないが、生徒が力を出しきって彼らなりの自然な文章で綴ればそれでよいと思う。

発表資料のつくり方は、ごく基本的な工夫のしどころだけ指示をすれば（研究の段階で妥協せずに正確な読みを引き出している）あとは生徒にまかせておいてほぼ大丈夫である。図示したり、絵をかいたり、それなりに工夫していい資料をつくる力を持っている。

群読のための分かち読みの方法については、基本的な分け方の基準を示す。（登場人物によって分ける。視点の変化によって分ける。場面の变化、起伏によって分ける／一人で読むか、複数で読むか、複数の場合、何人で読むのが適当か）し

(5) 指導計画

次	時	学習内容	学習活動 ねらい	備考
1	1	声で表現する ということ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の内容とすすめ方の説明……目標と役意識をはっきりさせる。 ・話すということ、声で表現するということについて、教師の体験と考えを話す。教師による現代詩の朗読。 ・テキスト（原文に傍注をつけた資料）の見方の説明。 ・テキストを各自、音読してくることを課題とする。 	(教室) テキスト配付 プリント 「ことばとからだ」 (資料3)
2	2	「平家物語」 概略の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が「平家物語」の概略を説明する。(図版などを示しながら、紙芝居風に) ・「平家物語」全体の流れをつかみ、その中での各教材の位置を把握する。 ・各自、どの場面を担当したいか、考えながら聞く。 ↓ 〈役割決定〉 祇園精舎(6名) 宇治川先陣・木曾最期(12名) 忠度都落・忠度最期(9名) 知盛(12名) 各場面をつなぐナレーション(6名)	(教室) 年表・系図・ 地図のプリント 配付
3	3 4 5	グループによる 内容研究	<ul style="list-style-type: none"> ・各場面の内容、人物の心理など、研究の手引きのプリントに従って、グループ毎に考える。 ・文献の使い方、図書室のマナー、グループ研究のすすめ方などを身につける。 ・研究したことをプリント1枚の資料に工夫してまとめる。 	(図書室) 研究の手引き 資料用・ナレーション用 プリント 文献
		ナレーション づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・各場面をどのような視点でつなぐか話し合い、ナレーションをつくる。 	
4	6	グループ研究 の発表	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで作成した資料をクラス全員に配付し、発表を行う。担当した場面のポイントを他のグループに伝えてクラス全体の共通理解をはかる。 ・発表時間は各場面5分。発表原稿もできるだけ用意させる。 ・発表のマナー、聞く態度、質問への対応のし方を指導する。 ・ナレーションの班は、ナレーションのプリントを配付し、ナレーションの意図を説明する。 ・教師が、内容の補足説明、擬態語、擬声語、音便についての説明を行い、語り物としての「平家物語」の特徴を意識させる。 	(教室) 各班の発表資料 ナレーションの プリント 配付

次	時	学習内容	学習活動 ねらい	備 考
5	7・8・9	群読研究 群読練習	<ul style="list-style-type: none"> ・担当場面の文脈・場面や視点の転換、行為の主体、心理、場面の起伏などを読みとりながら、分読の話し合いを行う。 ・分読の点検をうけて合格したらグループ毎の群読練習を行う。 ・クラス全体で読み合わせ、仕上げをする。 	(視聴覚室) 発声練習
6	10	群読発表	<ul style="list-style-type: none"> ・群読発表 (約40分) ・学習のまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・声で表現すること ・読むということ—正確さと豊かさの組み合わせ ・古典を自分の中に甦らせるということ ・一人ひとりが学習の主役になるということ ・グループ日誌、学習の感想提出を指示する。 	(視聴覚室)

四、学習経過と生徒の感想

(1) グループ学習日誌より

十一月十二日金曜一校時 二の三班〔忠度都落・忠度最期〕

記録者(長橋美紀)

〔活動内容〕

〔忠度の都落の内容のはあく〕

○あらすじの確認↓皆で内容の論議をした。

○言葉の意味を辞書によって調べる。

〔忠度の最期〕

○あらすじの確認

○言葉の意味を辞書によって調べる。

※グループを二つに分けて分担作業にした。

〔反省・感想など〕

授業前にあらかじめ読んで理解しておくべきだった。古典は他の教科に比べ学習するのがとても難しいものだと思う。歴史的仮名づかいもさることながら、言葉の意味が全くわからないものが多かった。しかし、辞書を片手にグループ團結して学習にはげむって、とっても楽しかった。古典によって昔のことに興味が出てきて、勉強するのが楽しいなって気もする一日でした。

た。

(傍線：◎) これが「学習の味」なんです。

十一月十三日金曜日六校時 二の五 班 (祇園精舎)

記録者 (本多綾子)

(活動内容)

各班で今まで調べてきたものを、研究発表してもらった。そして、各人わからないところや意見があったら発言していき、質問者ができるかぎり納得させようとした。全員がなれないせいか、時間が延長してしまふ。最後に音便などの説明を聞いた。今度の時間までに群読の準備をしておく。

(反省・感想など)

今日の発表は決して満足できるものではないかもしれないけど、私達は精いっぱいやったつもりです。昨日 (十一日) 先生に注意されて、テキストも二、三回読みました。自分なりにいくらか理解したと思います。初めての自分達の授業ってかんじでとてもよかったです。先生に「一から一〇まで教えてもらうのもいいですが、自分達だけで討論しあうのもなかなかおもしろいものなんです。この平家物語を終えた時、なんて思うか、それが問題なんです。ここまでがんばってきたんですから、快感を味わってみたい、そうなるように努力したいと思えます。

十一月十二日金曜日二校時 二の二 班 (宇治川先陣木曾最期)

記録者 (池田、福島)

(活動内容)

宇治川の先陣 (群読の人数わけ)
木曾最期

人数わけは半分は終わった。あとは今週中に終わります。

(反省・感想など)

十月二十七日からグループ活動がはじまった。私達の班は家に帰り、一人一人がぶんとしたのでプリントははやく出来上がった。第一のなんもんは終わり、第二のなんもんの声出し (傍線：◎) 漢字でかこう) 日頃の不満をこの声にたくし、大声をおなかの底から出し、人にわかりやすく読もうと思っている。

(◎) そうだ。まず自分の声を解放することだ。この授業はきつと忘れる事ができないと思う。「話す」ということを日頃なげなくかわしているが、生きてゆく為に大変大切な事であることを少しわかったような気がする。

先生、出来上りを楽しみにして下さい。

(◎) もちろん、心から楽しみにしています。

十一月十六日火曜日二校時 二の二 班 (宇治川先陣・木曾最期)

記録者 (前田・松本)

(活動内容)

宇治川の先陣 ・ 群読の人数わけ
木曾最期 ・ 群読の練習

(反省・感想など)

いよいよ明日は群読の読み合わせだ。今日の練習の時間、読み合わせをしたけど、全然あいませんでした。ショック。私の班は一人ずつの所が多いので、各人、家での練習をがんば

はるうと先陣のようにいきこんでいます。

さぞかし先生も、明日の群読の読み合わせは楽しみとのこと
思っています。私たちはこの群読にせいせい堂々声を出すことを誓
います。

十一月二十日土曜一校時 二の一 班〔知盛〕

記録者（小林、大賀）

〔活動内容〕

群読のためのうちあわせ

〔反省・感想など〕

今日の、どこを何人でどこまで読むか話し合うのがむずかし
かったです。あれ、ちゃんと文を理解してなければできません
ね……。おまけに知盛は五枚もあります。

発表まで少しの時間しかないので、みんなにめいわくをかけ
ないように、私、がんばらなければ。この発表、楽しみです。
みんながどこまでうまく読めるのか？

知盛の性格、好きです。えらいんだなと思います。

こんなにグループで力を合わせて活動するの大変だけど、み
んなでやったんだという気がしていいと思います。

十一月二十日土曜一校時 二の一 班〔宇治川先陣・木曾最期〕

記録者（鈴木麻香）

〔活動内容〕

群読のためのうちあわせ

〔反省・感想など〕

やっとまわってきた日誌、最初は全然やる気がなくて、

「なんで、大きさにこんなことするのか」と疑問をもって
きました。

班のみんなと、放課後おそくまで残り、朝も早く学校に行く
こんな風に、勉強のために意欲をもったのは、

今までになかったと思う。

もうすこしで『平家物語』終わってしまおうけど、

群読も、最後までがんばりますので先生も期待を。

また、こんな風に班をつくって勉強できたら、

学校に来る楽しみもふえるのに。

十一月二十四日水曜三校時 二の一 班〔祇園精舎〕

記録者（本田雅子）

〔活動内容〕

グループごとに読む練習

〔反省・感想など〕

今日も先生から注意を受けました。毎回、毎回注意を受ける
みたいで私たちのクラスは進歩がないんでしょうか？授業時間
は残りわずか一時間となりました。それまでに、群読は完成す
るでしょう。そして、私たちには、やりとげたという充実感と
クラスの和が残るのかもしれない。今まで何となく過ごして
きたクラスが、古典を通してどう変わるかは群読が終わって初
めてわかることだと思います。

毎回、注意を受けるたびに、私たちは、群読という今までの
授業とはちがう、ものすごいことをやっているんだなあーと今
だに思ってしまう。もちろん、今まで考えてきたこともそ

うですが、読むことしたい一人で読むことさえ難しいのに、それを二人、三人、またはグループ全体で読むなんて、本当に私達に出来るのかなあと、つくづく思っています。あともう少しで完成させなければいけません。はやく二年一組の『平家物語』を作りたいですね！

十一月二十四日水曜三校時 二の二 班 (宇治川先陣・木曾最期)

記録者 (高木敏恵)

〔活動内容〕

群読の練習

〔反省・感想〕

今日は私の日誌当番です。今までずーと班で研究をやってきました。だんだん古典が好きになりました。昔の人の気もちや考えていることがいろいろわかるんで、読んでいるうちに、すいこまれていきそうな感じですよ。今日は、群読の読み合わせを班で行いました。何回も何回も読んでいるうちに、自分の担当のところの人物になりきってしまいます。早く自分の担当のところをマスターし、早く群読をしたいです。すーごくいいものができると思います。みんながこんなに協力したのは、古典のおかげですね！

これからも、古典の授業以外でも協力性が出ると思います。まだ、あと少し、先生にいろいろ助けてもらうことがあると思います。

完成まで、はり切って班みんながんばります。

みんな「Fight」

十一月二十四日水曜四校時 二の二 班 (忠度都落・忠度最期)

記録者 (全員でかいた)

〔活動内容〕

群読

〔反省・感想など〕

今日は少し寒かったが、みんなよく声が出ていて、がんばっていた。

「今日が最後なんて、名残りおしいなあ」「うん」

常吉、泰三談

約一カ月間、みんな忙しいのにがんばったので、充実した日々が送れたようだ。

今日は、充分力を発揮できない人がいたが、みんなよくがんばった。先生、ごろうさま。どうもありがとうございます。今度のことは、それなりの形でみんなの心の中に残っていることと思う。

十一月二十五日木曜五校時 二の五 班 (祇園精舎)

記録者 (照平弘子)

〔活動内容〕

最後の発表会 全員で群読

〔反省・感想など〕

一カ月前、ぶ厚い十何枚の平家物語のプリントをもらった。研究の手引きを調べるのから始まって、資料作り。先生に注意されながらみんなで作りあげた。

日曜日に出てきて朝一〇時ごろから夕方七時まで、ギャーギャーワイワイ文句を言いながら、前までの私たちなら投げ出して途中でやめていた。それが最期までやりとげた。そして、今日の群読、みんな自分たちなりによく頑張ったと思う。最後の先生の「みんな、よかった！」この言葉で、これまでの苦勞というほどでもないが、救われた思いがした。

五、まとめ

(1) 読みの深化が課題

今回の学習では、やっと群読にこぎつけたという感じで終わったので読みを深め、声の表情を豊かにする余裕がなかった。そのような力をじっくり育てていくことが私自身の課題である。

読みの深化については、例えば、大村はま先生の実践にある

- ① 筋をはっきりさせる。
- ② 話しことはを読む、書きことは読む。
- ③ 心の波を読む。
- ④ 一人の読みを生かす。
- ⑤ 対照的な動きを読む。
- ⑥ 空しくひびくことばを読む。
- ⑦ ことばになっていない深い思いを読む。

〔大村はま国語教室〕〔筑摩書房〕三巻P一七〇～一七九〕
のようなきめの細かい読み深めを進めることが必要だろう。また、その読みとりを生かすために、声の表現の幅をきたえなければならぬ。大がかりな群読に入る前の段階として、そのような力を

育てる学習の場を息長く続けるべきだろう。

(2) 群読の効果におぼれない——個々の読みの過程を大切に

群読は、学習集団をつくる上で、確かに非常に大きな効果をもたらす。約一カ月間の生徒一人ひとりの苦闘を見てきた者にとつては、約四〇分、クラス全員の声で構成して読み合う群読は、実に感動的である。しかし、それで有頂天になってはならない。効果の大きさにおぼれて、安易に群読を使ってはならないと思う。

① 群読に適切な教材かどうかを十分見きわめること。

② 群読することで個々の読みとりをぶつけ合う過程を重視し、大切に育てていくこと。

(3) 体を動かし、声を出し、行動につながる学習へ

最初に述べたように、へしなやかな体をつくるのが、国語教育の基本に考えられている。教室で、時に体育館やグラウンドや中庭に出て、自由に動きまわったり、柔軟体操をしたりして声をきたえ、何かを声で表現する授業をもっと考えたい。そうして育った〈声の表現力〉を実際に生かす場を生徒自身がつくっていくこと、即ち、生徒会活動、クラス活動、文化祭などにおいて構成詩の朗読、劇をつくりあげようという動きが生まれたり、学校外において、たとえば子ども文庫のような場に参加して、語りきかせ、読みきかせなどをするこをうながしたい。学校で得た力が真に一人の人間の中で根づくかどうかは具体的には彼が生活する地域環境の中で、どのような文化の担い手になれるかということに現われるだろう。教科教育といえども、教室の中だけで完結する学習などあり得ないし、学校はその中だけで完結する教育力

個人ノート

〔担当した仕事〕 (祇園精舎) 班

・グループ研究

- 唐の祿山
- 秦の趙高

・群読

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり
 咲離双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす
 たけきものゝ塵に同じ、梁の朱昇、天慶の純友
 此等はおこれるゝありしかども
 伝え承るこそ心も詞も及ばれぬ

〔学習を終えて〕

今日の授業は、なんだか、今までにない胸にジーンとしみるものが、こみあげてきました。一人一人の声が部屋じゅうひろがり、自分の役をはたして、今にも平家物語にとうじょうする人たちが、そこにでてくるみたいな感じがしました。この前、読みあわせした時より、今日の方がはくりよくがあつて、うまくできたと思いました。先生が「みんな一人一人がこのドラマの主人公だ」と言われた意味がなんだかわかったような気がします。群読というものは、すばらしいものだなと思いました。

さこな先生が「今日のはすこくよかったよ」と昼休みに会った時、言われました。なんとなく、うれしかったです。

約一か月間、この勉強をやってきて、楽しかったです。私は、最初この授業をはっきり言って、なめていました。ほとんどでき当です。でも先生の出された課題は絶対一人一人が力をだし、協力しあひやらなければならないことばかりです。で先生から職員室で注意を受けました。あの時、私はちゃんとしなきゃだめだなと思いました。それからたんだん平家物語の授業にしたしみがでて、班のみんなでがんばりました。先生には、迷惑ばかりかけて、すみません。

私は、群読というものは、どういうものか、あんまり知りませんでした。群読を行うまでにいろいろ調べて内容を理解しました。そして、それをやっとなりにしてきて、聞き手までとどいて、みんなのチームワークがあつて、群読といえるんだなと思いました。言葉を大きな声でだし、聞き手に伝えることは、なんだかむずかしかったです。思うようにでてこなかったです。

ふだん授業中、本を読んだり、発表したりする時の今まで自分が発言してきたことを思いだしてみると、ほとんど相手を無視です。自分の周視だけにしか、とどかない声をだしていったようです。あらためなければなりません。なんか今気分がさわやかです。クラスみんなでやりとげたんだなと、まんぞくです。

私も一人の主人公として参加できたこと、うれしいです。ワンタンではあります。この体験は決して私の心の中からきえないことでしょう。

これからの生活に役立てていきたいと思ひます。

先生ノ 楽しかったね、祇園精舎の班最高ノ、さいごまでがんばったもんね。先生おつかれさまでした。仰うちあげはしよおね。修学旅行の時、瀬戸内海で平家の赤旗は見つけてくっけんね。

(長崎県立島原商業高等学校教諭)